

水稻新品种「石川 65 号」の移植栽培における施肥法

1 背景・目的

大規模経営体における収穫作業の競合回避や収益力向上に資する晩生品種「石川 65 号」の移植栽培において、その特長である高い収量性及び良食味を最大限に発揮する施肥法について検討する。

2 技術のポイント

- (1) 収量 700kg/10a を確保する成熟期の窒素吸収量は 15kg/10a 程度であり、これは慣行コシヒカリより 5kg/10a 程度多い水準である(図 1)。
- (2) 窒素吸収量を 5kg/10a 高めるには、窒素施肥量はコシヒカリ慣行施肥量より 5kg/10a 増やす(図 2)。
- (3) 5 月下旬移植の晩植では、生育過剰や倒伏防止のため、慣行コシヒカリ同様、標植より基肥窒素量を 1kg/10a 程度減肥する。
- (4) 収量 700kg/10a かつ整粒歩合 70%を確保する適正粒数は概ね 32 千粒/m²である(図 3、4)。

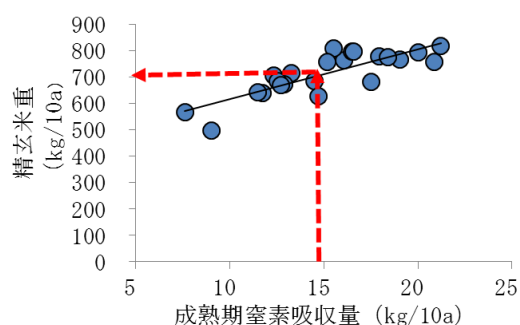


図 1 収量と成熟期窒素吸収量の関係(H26~27)

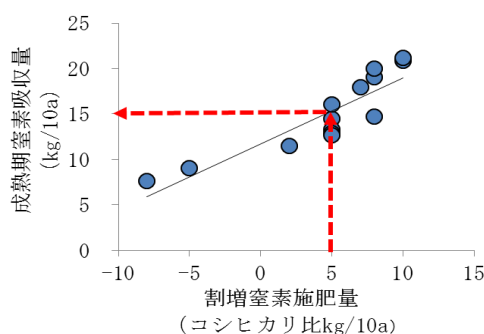


図 2 成熟期窒素吸収量と割増窒素施肥量の関係(H26~27 標植)

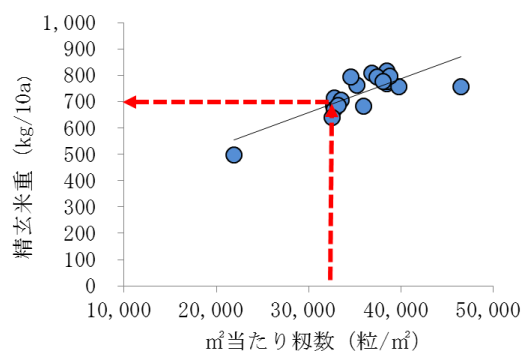


図 3 総粒数と収量の関係(H26,27)

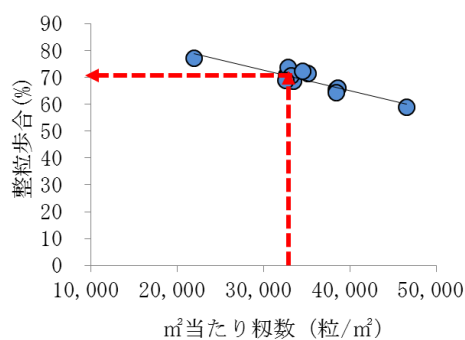


図 4 総粒数と整粒歩合の関係(H26,27)

3 成果の活用と留意点

- (1) 倒伏リスク低減や良品質米生産の観点から、1回目穂肥は出穂 20 日前とする。
- (2) 石川 65 号は穂重型品種であり、穂数を確保するため栽植密度は 60 株/坪以上とする。

問合先：作物栽培グループ TEL 076 - 257-6911
 担当者：島田雅博、宇野史生